



音楽の都で

オーストリアのウィーンに暮らす友人宅に転がり込んだ時から、私はヨーロッパの虜になった。その年から毎年数ヶ月、お金をためてはヨーロッパ諸国を旅するのが楽しみだった。どこを切り取っても画になる建造物とサマータイムのピンクの空、適当に入ったベトナム料理屋のテラス席で初めて見る銘柄のビールを飲みながら友人と再会を祝って会話が弾む。

友人とは中学時代同じ吹奏楽部で、朝六時おきの朝練を週7で共にした仲だった。あの頃はただ必死で特に深く考えることもなく配られた楽譜にかじりついていて、この街を訪れて改めてクラシック音楽に触れたくなった。芸術は、それが生まれた場所の匂いや環境、当たり前だがそれを生み出した人物の背景をそのまま閉じ込めている。

この街で活躍した数々の天才作曲家たちの脳内がどんな構造になっていたのかなんて想像もつかないが、この街の荘厳な建造物や少し憂いを帯びた空の表情を見ていると、あの音楽たちが生まれて来るわけもなんとなく、わかるような気がする。

モーツァルトにベートーヴェン、シューベルトにヨハンシュトラウス。

現代ではもう誰もが知る歴史上の偉大な人物として記憶しているので、ついつい同じ人間だという

Moon River

02



事を忘れてしまうが、彼らも朝目覚めてきつと同じようなトーストを食べ、同じようなコーヒーを飲み、愛に傷つき、恋に溺れ、同じようにちょっとダルい事もあったり、もしかしたらグリーンピースが食べられなかったのかもしれない。(私と同じで)

ウィーンといえば、モーツァルト。街には至るところに旗がかかっている、手軽なスーパーにも、路面店にも「モーツァルトチョコレート」が売られている。モーツァルトはこの街で、どんな日常を生き、どんな事を考えていたのだろう。芸術家には努力家が多いと聞かすが、モーツァルトはそんな名だたる作曲家の中でもずば抜けた神童ぶりだったというのは有名な話。わずか5歳で鍵盤楽器からヴァイオリンの技術までほぼ習得、14歳の時に訪れたローマにて礼拝堂で演奏されていた、当時絶対門外不出だった合唱曲を一、二度聞いただけで完璧に耳コピしてしまい、外に出てすぐに楽譜に書き起こしてしまったという話も。

そんなモーツァルトは35歳という若さでこの世を去るまで、数々の名曲を世に送り出すのだけれど、才能あふれる故、少しオマセさんだったらしい。7歳でヴェルサイユ宮殿で演奏したときには、あのマリー・アントワネットにプロポーズしたそう！ そんな少しオマセで、ロマンティックなモーツァルトが街中にはためく現代のウィーンを、本人はどんなふうに眺めているのだろうか。朝から晩までモーツァルトの音楽が流れ、音楽家たちがそのメロディを奏でている。

とても不思議なんだが、クラシックを聴きながら味わうビールやコーヒーはなぜ味が変わるのだろうか。深みが増し、勝手に脳内で映画のようなワンシーンが映し出される。それは自分が見てきた人生の様々なシーンの走馬灯のような。

中学生の頃は、クラシックなんて退屈だ。なんて思っていた。どの曲聴いても一緒だし、眠くなる…と。けれどそれは、クラシックが退屈なのではなく自分自身が退屈な人間だったのかも。お酒もコーヒーもクラシックも、人生が深まれば深まるほどに味が変わっていくものなのかも。

「ねえってば、聞いている？」

パッと目を開けると、友人が笑いながらこっちを見ている。時差ボケにビールですでにほろ酔いの私はまぶたが重い(笑)。中学時代、同じ音楽を奏でた仲間が目の前に、しかもウィーンの夕暮れと一緒にビールを飲んでいるなんて。そういえば苦手だったビールもいつの間にか飲めるようになったしね。

この日は時計が十二時を回るまで。

ウィーンの長い夜—— 笑い声が響いた。

azufeelng